

〈報告〉

「日本語」で通じ合った5日間

——日本語教育演習 名古屋研修旅行に参加して——

佐藤 菜摘

大ベストセラーにもなった、日本語教師とその下で日本語を学ぶ外国人生徒達の様子を描いたコミックエッセイ。それが、私が日本語教育に興味を持つきっかけだった。もともと日本語の成り立ちや語源などに興味があった私は、読みながら自分でも日本語のおもしろさに気付くと同時に、それらを外国人に教えるという職業に惹かれていった。

今回、私は日本語教育演習の授業の一環として行われる研修のため、名古屋にある南山大学の留学生別科を訪れた。2年生から始まった日本語教育の授業の内容は興味深いものばかりで、この研修の話を知った時はとても嬉しく、話を聞いたその日に行きたいと名乗り出た。

名古屋研修の中心となる活動は南山大学留学生別科で学ぶ留学生との合同プロジェクトワーク（調査、発表のグループワーク）である。プロジェクトのテーマは「日本の教育プロジェクト」。留学生とともにチームを組み、論点を設定してともに教育現場を訪問して調査を行う。私のチームはMG生2人、留学生2人の4人で構成されることになった。

名古屋に向かう前、事前に同じチームの留学生2人から、研修で行うプロジェクトのテーマについて調べた報告書が送られてきた。いざ目を通して驚くこととなる。その文章は私の予想を遥かに超えるものであったからだ。多少の文法や単語の間違いはあるものの、論理的にまとめられた文章、その中で正しく使われている難しい表現や漢字。日本人の大学生並みの文章力である。報告書を読み進めていくうちに、本当にプロジェクトを成功させられるだろうか、かえって足手まといにならないだろうか…と不安が募った。先生からこのプロジェクトは留学生達の成績に関わると聞いていたことがさらに不安を助長した。しかし、そんな気持ちになったところで何も始まらない。気持ちを切り替えて、その報告書に返事を書いた。少しでも今後のプロジェ

クトに役立つように、報告書の内容を踏まえた上で自分の意見や感想を書き、間違っている文章の添削もした。この文章も名古屋に届いて、読んでくれるんだろうな。もうすぐ会える。書いているうちに研修に行くという実感が湧いてきて、先程までの不安はどこへやら、私の心の中は期待と希望でいっぱいになった。

1日目。飛行機に乗ると仙台から名古屋はあつという間だった。久々に飛行機に乗ったこと、初めて訪れる地ということもあって、私も友人達もはしゃぎながら空港内や街を歩いた。

私達はまず名古屋城を見学し、その後南山大学へ向かった。初顔合わせをする教室に着いたとき、留学生達はまだ授業中でほとんど教室には居らず、私は同じチームのMG生大森さんとメンバーの到着を待った。事前にメールのやりとりをしていたし、私自身元々人見知りはない性格だが、やはり初対面となると緊張する。少し待つと、教室内に授業を終えた留学生達がどんどん入ってきた。「あ、あの2人じゃないかな？」私達は手を振った。2人——タイ人留学生のサーとピンピンは私達に気付くと、満面の笑顔で「イエーイ！」とピースサインを向けてきた。2人が席についてすぐに「メールありがとうございます」「会えて嬉しい」「一緒に遊ぼうね」と会話が始まり、初めて会ったはずなのにまるで十年來の友と再会したように私達は話し始めた。

翌日の動きを確認し、大学内を案内してもらった後、2人に名古屋の街を案内してもらった。みんなでオアシス21の水の宇宙船できれいな夜景を眺め、美味しい味噌カツを一緒に食べた。その間もずっと話は途切れることはない。正直、初日からこんなに打ち解けることができるとは思わなかった。ホテルに戻って一息つき、私はこの一日を振り返りながら、これから本格的に始まるプロジェクトワークをやり遂げる自信のようなものを感じていた。そして「絶対成功させよう、明日から頑張ろう」と改めて気持ちを引き締めた。

2日目。午前中はチームでアイデアカードを使って「プロジェクトワークを成功させるためにはどうしたらよいか」というテーマで話し合った。私達のチームは、出た意見の中から最も良いものとして「時間に遅れない」「メモだけではなく動画を撮って原稿作りに役立つ」を選び、それらを意識してプロジェクトワークを進めることにした。

午後から、それぞれのチームで調査が開始された。私達のチームは「一般的な学校と南山中学校の英語授業について」を小テーマに掲げ、南山中学校

の男子部を訪問した。見学した授業は英語ではなく音楽の授業だったが、パソコンを使って作曲をするという、私達の予想を遥かに超えたハイテクな授業で、4人全員が驚きの表情を隠せなかった。授業見学後は、生徒達に対するインタビュー調査を行った。英語の授業に関して留学生2人が予め考えてきた質問を中心に、私もその場で浮かんだ疑問点を質問して生徒に答えてもらった。中学生達は質問への回答以外にも関連してたくさん発言してくれて、現役の中学生が英語の授業をどのように感じているか等、たくさんの情報を得ることができた。

3日目。前日のインタビューを元に、調べたことをポスターにまとめる作業を行う。限られた時間で完成させなければいけないので、分担して作業を行った。

「なつみ、はるか、こういう風にしたいんだけど…」作業の途中で留学生2人が声をかけてきた。2人は調べてわかったことをわかりやすく表にして、これを使いたいと申し出たのだ。もう1つ、これも留学生のアイデアで、発表を聞いてくれている人用にクイズを用意することにした。「なつみ、ここに絵を描いてくれない?」「ここはこう書き直したほうがいいよ」—私達はより良いものを作るために、留学生、MG生という垣根を越えてお互い言いたいことを素直に言い合えるようになり、完成した発表用ポスターは、私達の様々な工夫が凝縮されたものになっていた。そのポスターに絵心のある大森さんが留学生2人の似顔絵を描き入れてくれ、さらに「私達らしさ」が加わった。

完成後は4人で発表練習をした。担当を決めて通して練習し、その後細かい言い回しや表現などを調整して明日に備える。いつも授業での発表がある日の前日は、いくら万端に準備しても不安で仕方がないが、今回の発表は不思議と不安など全くない。むしろ楽しみで仕方がなかった。私達が一緒に取り組んだこのプロジェクトを、たくさんの人に聞いてもらいたいという気持ちでいっぱいになっていた。

4日目。発表会当日。私達の発表は練習通りに進めることができ、クイズもみんな楽しんでくれたように感じられた。一番緊張したのは発表後の質疑応答だ。聴衆の留学生達が私達の発表に対してどんどん質問を投げかけてくる。しかし、サーとピンピンがしっかりと対応してくれて頼もしかった。私と大森さんも、2人の補足に近い形で一生懸命対応した。

他のチームの発表も、興味深い内容でわかりやすくまとめられていた。新聞の一面のようにまとめてあるものや、写真やイラストをたくさん使って説明されているものもあり、チームによって多様なまとめかたがあって参考になった。発表後、少し緊張したが、手を挙げて質問もすることができた。

5日目。とうとう最終日となった。この日は午後まで自由時間だったので、サーとピンピンと待ち合わせをして、名古屋市科学館へプラネタリウムを見学しに行った。大きな恐竜の化石の前で写真を撮ったり、竜巻きを発生させる装置を見て盛り上がり…。お昼は留学生おすすめの味噌煮込みうどんのお店でご飯を食べて、おしゃべりをしながら最後の楽しいひとときを過ごした。お店から出た帰り道、思いがけないサプライズが起こった。なんと私達の目の前に歌手の北島三郎が歩いていたのだ。「あの人知ってる！日本の、すごく有名な歌手よね！」と留学生が見てはしゃぐ様子がとても可愛らしかった。

集合場所に向かう地下鉄の中、私は自分でも信じられないくらい冷静だった。もちろん、寂しいと思わなかったわけではない。このままだったらきっと涙を見せずに別れられるだろうと思っていたが、それは無理だった。集合場所で、サーに地下鉄のプリペイドカードを手渡した瞬間、私の目からポロポロと涙が零れてしまった。「なつみ、泣かないで」とピンピンが戸惑っていて申し訳ない気持ちになったが、涙は止まらなかった。私達は最後まで「ありがとう、また絶対会おうね」と何度も言い合って別れた。たくさん話してきたのに、最後は「ありがとう」しか言えなかった。

同じチームで行動した、しっかり者で癒しの存在だった可愛いサー、J-POPが大好きでダンスが上手だったピンピン。同じチームではなかったけれど、ムードメイカーの金、ピアノが上手なクラーク、冗談を言って私達を驚かせたブライアン…彼等以外にもたくさんの留学生達と交流した。彼等とは趣味や好きな物の話から、お互いの国の文化・生活・価値観などの話をし、その違いに驚いたり驚かれたりした。話をして初めて知ることが多く、私の中の物事の考え方や視点が広がったと思っている。彼等に出会えて本当によかった。今でも彼等とはメールや手紙で連絡を取り合っている。これからも私にとってかけがえのない友人達であり続けるだろう。

このような短い期間で、しかも初めて会ったばかりの人と、一つのことを成し遂げたことは私にとって初めての体験だった。ここで改めてこの研修を

振り返り、私達と留学生を繋いでくれた「日本語」を見つめ直してみたい。

私は日本語を母語としない相手に自分の意思をしっかりと伝えられるよう、使う言葉や表現を考えながら話をし、留学生達も、日本語で文字を書き、言葉を使って一生懸命私とコミュニケーションを取ろうとしてくれた。何より「この人と日本語で通じ合いたい」という気持ちが互いにあったからこそ、文化や言葉や心の壁を越えて、私達はこのプロジェクトワークを成し遂げられたのだと思う。また、会話の中で普段は省略してしまいがちな主語や、助詞に気を付けて話をするよう心がけ、頭の中で文章を組み立てていくうちに、日本語を改めて見つめ直すことができた。日本語は、たった一文字の助詞によって意味が全く別のものになってしまう。実は難しい言語だなと思うと同時に、ますます興味深いと思えるようになった。

言葉は、コミュニケーションを取る上で必要なツールだ。異なった言語を使う人同士が、英語でも中国語でも韓国語でも、どの国のどの言語であろうとも、共通して使うことができる言語を一つ持っていれば、コミュニケーションを取ることは可能なのだ。今回、「日本語」で通じ合えた私達のように。私は、普段何気なく使っている日本語が、このように通じ合う役割を果たすことがあるなんて、この研修に参加しなければきっと気付かずにいただろう。また、外国語として一生懸命日本語を勉強している留学生達の姿を見て、私もそんな人達の力になって、一緒に日本語を学んでいきたいと強く思うようになった。

一冊の本をきっかけに、興味から学び始めた日本語教育。この研修を終えて、その学びの目的は「興味」から「叶えたい夢」へ変わっていた。



南山大学外国人留学生別科の留学生とともに

2009年度日本語教育演習 名古屋研修旅行の概要

期 間：2010年2月16日～2月20日（4泊5日）

参加者：日本文学科 学生14名

訪問先：南山大学外国人留学生別科（愛知県名古屋市）

日 程：2月16日 仙台発 名古屋城見学、留学生とのティーパーティー

2月17日 「日本の教育プロジェクト」1日目（学校訪問）

2月18日 「日本の教育プロジェクト」2日目（発表準備）

2月19日 「日本の教育プロジェクト」3日目（ポスター発表会）

2月20日 市内観光 仙台着